

漏斗造民家の地域社会的意味

—犬井道集落における事例分析を通して—

入江 奈津子

はじめに

佐賀県南部の有明海沿岸地域には、「漏斗造」と呼ばれる茅葺き民家が存在する。漏斗造最大の特徴は、棟を口の字形にまわした屋根形態にある。この特異な屋根は、四方に平を見せ、また中央部に漏斗のような谷を形成するため、雨が降ると雨水は屋根を伝って谷に落ち、家の内部に作られた「雨樋」を通り外に流れ出るといった複雑な構造をもつ（図1）。

屋根形態の特異さゆえに、漏斗造に関する研究の多くは、主屋のみを切り出し、屋根形態の発生要因や発展過程について論じたものである¹⁾。しかし、民家はあくまで人々が生活を営む場であり、当然ながら単独では存在せず、一定のまとまりをなしてひとつの地域社会を形成する。したがって、民家を理解するには、特定の地域社会を構成する一要素として、その在り方を把握する必要がある。本研究は、漏斗造を、集中的な立地がみられた犬井道集落を対象に、集落を構成する住居群として読み解くことで、地域社会的視点から捉えなおすことを目的としている。

1. 犬井道集落における漏斗造の分布状況

本研究で取り上げる佐賀市川副地区犬井道集落は、漏斗造民家が多数存在した川副地区の中でも、突出した分布がみられた集落である。犬井道集落は、近世後期には複数の塊状集落だったものが、近代にかけての大幅な屋敷増殖によりひとつの巨大塊村となり、現在総戸数1500戸に及ぶ高密度な居住空間を展開している²⁾。

図2は、空中写真をもとに、犬井道集落における1962年の漏斗造民家の分布を示したものである。漏斗造民家は、明治期以降新たに形成された居住域に色濃く分布していることから、犬井道集落において漏斗造は古くから採用された民家形式ではなく、集落が拡大する時期に集中的に建設されたものと考えられる。近世の居住域に立地する漏斗造民家も、建設年代が必ず



図1 漏斗造の特徴

しも古いわけではなく、同時期に建設されたと考えられるものが多い。つまり、犬井道集落における漏斗造の普及は近世末から明治期にかけての集落拡大期に起こった現象であり、その背景には何らかの社会的意味の存在が予想される。

2. 主屋の構成原理

ここでまず、本章では漏斗造民家の空間特性について分析し、構成原理を明らかにする。ここでは、実測調査やヒアリング調査によって得られた8事例に加え、『佐賀県の民家』³⁾に取り上げられた10事例の計18事例を対象とする。

2-1. 平面構成の特徴

まず、平面構成について機能的視点から分析する。漏斗造の平面は、居室群とニワナカと呼ばれる土間の二つの部分で構成され、居室群には3室型・5室型・6室型が存在する（図3）。室数や規模は様々であるが、漏斗造の平面構成には共通した特徴が見受けられる。

まず、居室群とニワナカの間には機能的な優劣が存在する。特に、ザシキとニワナカの境界には必ず壁が配置されるため、ニワナカから直接ザシキへ入室することはできず、空間的にも不連続な構成となっている。また、6室型への展開は、5室型のザシキの横にナカノマが付加され、さらにニワナカからの分離が進む。

次に、居室群をみると、5室型以上では居室が3室

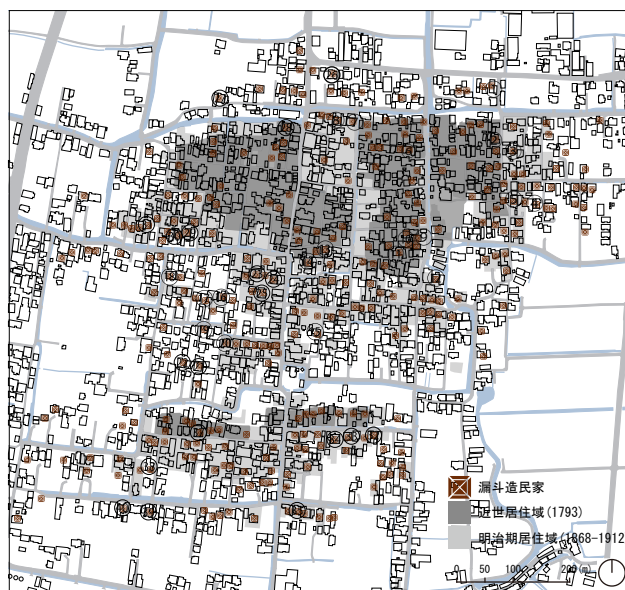


図2 犬井道集落における漏斗造民家の分布

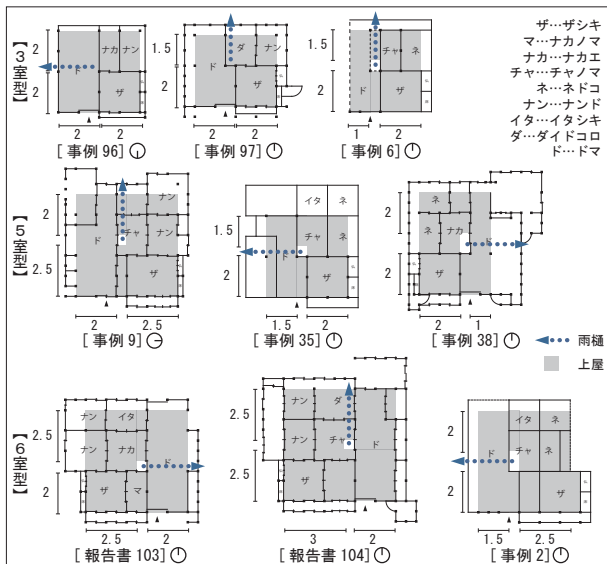


図3 漏斗造の平面構成

型の奥行き方向に付加される共通点が存在する。そのうちワナカに接する居室には、接客空間としてのザシキ、日常の団欒の空間としてのナカエ、農作業の合間の簡単な食事の空間としてのイタシキ、という使い方のヒエラルキーが存在する。また、2室あるネドコの使い分けも、ザシキ側が家長夫婦、奥が若夫婦と決まっていた。このように、居室群には居室の展開から使い方、使い分けにまで及ぶ方向性が存在していることがわかる。本研究では、この方向性を“オモテウチ”と呼ぶことにする。これらの居室は、オモテ側にあるほど機能的に優位な空間となる。

以上より、漏斗造の平面には、居室群とワナカの明確な序列、オモテウチの方向性、そして中核的存在としてのザシキという共通した構成原理が見出せる。

2-2. 架構の形成

次に、架構が判明している8事例を対象に、上屋架構について構法的視点から分析すると、平面構成の原理は架構にも及んでいることがわかる(図4)。

まず、軸組をみると、上屋の外形に合わせて軒桁が配置され、ザシキは必ず上屋に取り込まれる点が共通する。また、ザシキを囲うように敷桁が生まれ、ザシキ上部には中引梁と小屋梁が架けられる。

次に、小屋組をみる。四辺の扱首の幅、つまり棟の高さは、概して居室上部が高く、土間上部が居室上部より高くなることはない。さらに、扱首は屋根の谷がザシキよりウチ側に形成されるように構成される。

つまり、漏斗造は平面構成の原理を軸として空間化された、非常に形式的な住居形態であることが指摘できる。また、空間化されることで、ザシキのある主屋正面が漏斗造において重要な一面として位置づけられているのは明らかである。

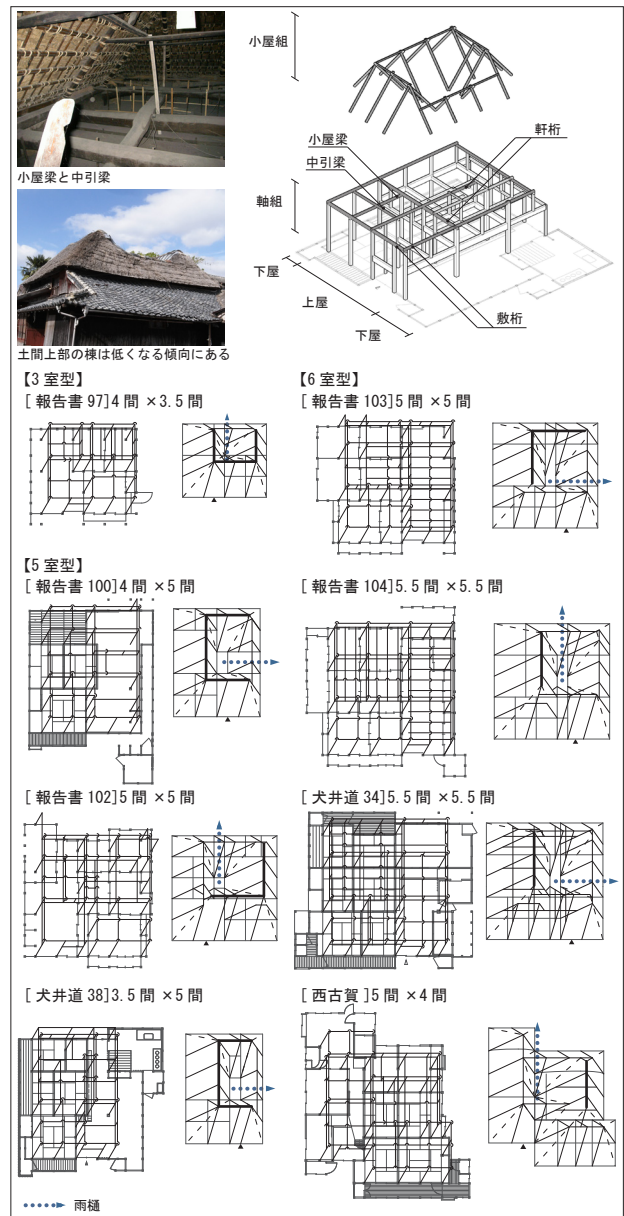


図4 漏斗造の上屋架構

3. 屋敷の構成原理

こうした特性をもつ漏斗造の、地域社会との関係性を明らかにするため、本章では犬井道集落に現存する漏斗造民家を対象に、屋敷の構成原理について分析する。犬井道集落には、2010年時点で40棟の漏斗造民家が存在している(図2数字)。

3-1. 主屋と屋敷構えの関係

漏斗造の屋敷構成は各々で少しずつ異なり、主屋と屋敷構えの関係に一貫した形式はみられない(図5)。例えば[事例35]、[事例39]は類似した立地状況にあるが、主屋正面は作業庭のある南側に向く[事例35]とミチに面した北側に向く[事例39]とで異なる。集落内の主屋の向きは一定ではなく、また玄関の位置は右勝手・左勝手が混在する。つまり、主屋の空間構成の主軸となる原理は、住居以上には及んでいないことが指摘できる。

3-2. 雨樋からみる屋敷の構成原理

それでは、屋敷構成はどのように規定されるのだろうか。漏斗造の特徴である雨樋に注目し、雨樋の向く空間とその特性について分析する。

3-2-1. 屋敷周辺と雨樋の方向に関する分析

まず、雨樋の方向と屋敷周辺の環境との関係について分析する。表1は40事例の内、雨樋の方向がわかる20事例の周辺環境をまとめたものである。表1より雨樋は、隣接する屋敷の背面や側面、コミチに向きやすく、屋敷正面やヨコミチには向きにくい傾向がみられる。

3-2-2. 屋敷内での雨樋の方向に関する分析

次に、屋敷内の雨樋の方向について分析する(図5)。屋敷内では、雨樋が出る空間を敷地境界に寄せて狭くしたり、その間に付属屋を設けるなどして、屋敷内に作業庭や水路に接する空間を確保しており、限られた空間を有効活用している事例が多く確認できる。

3-3. 屋敷構成における“ウラ”空間の設定

本研究では、屋敷内の雨樋が向く空間を“ウラ”空間と定義する。ウラ空間は、雨樋から流れ出る雨水を処理する場所であり、雨樋をもつ漏斗造の屋敷内に必然的に一カ所形成される。雨が降ると、ウラ空間には雨水が溜まり、使い勝手の悪い場所となるため、ウラ空間の設定が屋敷構成に与える影響は大きいといえる。

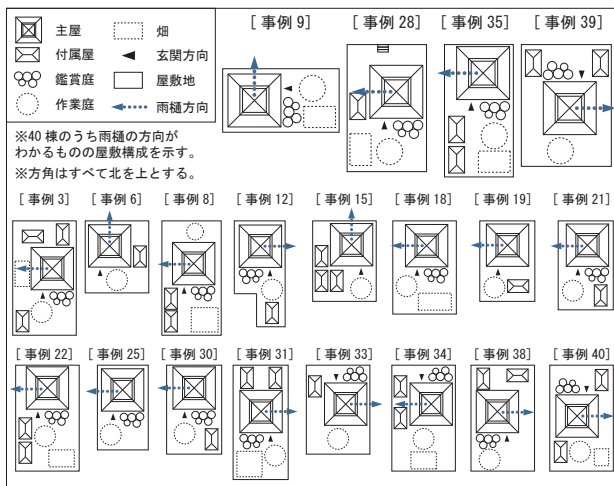


図5 屋敷構成モデル

| 家屋番号 | 玄関 | 勝手 | 雨樋方向 | ウラ(明治期) | ウラ(1962) | ウラ(2010) | 他方(1962) |
|------|----|----|------|---------|----------|----------|----------|
| 03 | 南 | 左 | 土間 | タテミチ | タテミチ | 道路 | 屋敷正面 |
| 06 | 南 | 左 | 塀 | 宅地 | 屋敷背後 | 屋敷背後 | 屋敷側面 |
| 08 | 南 | 左 | 土間 | 宅地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 09 | 東 | 右 | 土間 | 宅地 | 屋敷背後 | 屋敷 | 屋敷側面 |
| 12 | 南 | 右 | 土間 | 宅地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 15 | 南 | 左 | 塀 | 宅地 | 屋敷背後 | 空き地 | タテミチ |
| 18 | 南 | 左 | 土間 | タテミチ | タテミチ | 道路 | 屋敷正面 |
| 19 | 南 | 左 | 土間 | 農地 | コミチ | コミチ | ミチ |
| 21 | 南 | 左 | 土間 | 農地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 22 | 南 | 左 | 土間 | 農地 | 屋敷背後 | 屋敷背後 | 屋敷側面 |
| 25 | 南 | 左 | 土間 | タテミチ | タテミチ | 道路 | 屋敷正面 |
| 28 | 南 | 左 | 土間 | コミチ | コミチ | コミチ | 屋敷側面 |
| 30 | 南 | 左 | 土間 | 宅地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 31 | 南 | 右 | 土間 | コミチ | コミチ | 道路 | 屋敷側面 |
| 33 | 北 | 右 | 居室 | コミチ | コミチ | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 34 | 北 | 右 | 土間 | コミチ | コミチ | コミチ | ミチ |
| 35 | 南 | 左 | 土間 | 宅地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | ミチ |
| 38 | 南 | 右 | 土間 | 農地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 39 | 北 | 左 | 土間 | 農地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |
| 40 | 北 | 左 | 土間 | 農地 | 屋敷側面 | 屋敷側面 | 屋敷側面 |

※ヨコミチ：東西方向のミチ。タテミチ：南北方向のミチ。コミチ：宅地に引き込まれた袋小路

表1 屋敷の周辺環境

これまでの分析より、犬井道集落では、ウラ空間を一定方向ではなく、周辺状況や生活空間への要求に応じて臨機応変に設けていることが窺える。

したがって、漏斗造民家の屋敷構成は、各家を取り巻く環境と、その環境下での各家における空間要求に対応した、柔軟性をもったものとみられる。

4. 地域社会の中の漏斗造

4-1. 主屋における雨樋の位置付け

雨樋は、特異な屋根形態が作りだした装置である。しかし、雨樋の存在は主屋の形成に直接関与していないことが推測される。まず、雨樋は架構と構造的に切り離して設置され、その方向と棟の高さに必ずしも相関はない。また、オモテウチの方向性とウラ空間の位置にも、明確な関連性はみられない。さらに、小屋裏が利用を目的とした空間ではないことから、屋根形態は利用と結びついたものではないことが指摘できる。

4-2. 屋敷構成における雨樋の位置付け

漏斗造採用の要因を雨樋による雨水の確保と論じた説⁴⁾があるが、ウラ空間には雨樋に対する特別な設えが存在しない。むしろ雨樋を下屋上部に設け雨水を屋根に流す事例が散見されるなど、ウラ空間は雨樋の利用を目的とした場になっていないことが指摘できる。つまり、雨樋には積極的な活用はみられず、ウラ空間は屋敷における機能的なプライオリティの低い空間と位置付けられる。

4-3. 漏斗造の社会的意味

これらのことから、雨樋や複雑な屋根形態自体は、目的ではなく結果として生じたものと考えられ、言い換えれば、代わりに他に得たものがあることを示している。これまでの分析を踏まえると、漏斗造は、共通の空間構成原理を展開させ類似した形態を得ている一方で、その形態が住居内部の生活に^{ひら}応答したものではないことが窺える。つまり、漏斗造という民家形式の本質は、外側に対する表裏的作用、すなわち民家自体の表裏性にあると推測できるのである。

その一因として、屋根外面が全て平である点が大きく影響していると考えられる。犬井道集落では、主屋正面を重要と捉える民家形式を採用しながら、正面が周辺と規定された関係にない。つまり、正面同様に四方に平を見せる上屋の獲得には、家を様々な方向から見られる可能性に対する住み手の意識が窺える。また、その利点を積極的に活用した事例も存在する。[事例37]は、主屋背面をヨコミチに向け、店舗として利用している。漏斗造を採用することにより、主屋の正面性を

保持しながら、主屋背面も店舗正面としての体裁を確保しているといえる。

5. 個別事例検討

以上の考察を踏まえて、事例検討を行う。ここでは、集落南部に位置する[事例34]Em邸とその周辺を取り上げる(図6)。

5-1. 概要

Em邸は、間口・奥行きともに5.5間の正方形の上屋が架かる、比較的規模の大きな漏斗造民家である。建設年代は、近世末期から明治初期頃といわれている。

5-2. 架構

Em邸の小屋組をみると、居室上部3間、正面・背面2.5間、土間上部2間の扱首が架かっている。これらの扱首は各棟で自立した構造をとらずに、2間扱首に依存する形で一体的な構造をとっている。また、3間扱首の端部は、細かい材の組み合わせによる処理が施されている。屋根は大きくなるほど風圧に弱くなるため、こうした工夫によって屋根が受ける力を分散させているのではないかと考えられる。

この複雑な小屋組はEm邸における個別解であり、他の事例とは異なる。つまり、架構自体は平面の規模や構造的な技法などの摺り合わせによる個別解でありながら、共通の原理が展開されることで、結果として形式化した外観を獲得しているといえる。

5-3. 屋敷構成

Em邸の主屋は、屋敷北側のヨコミチに面して建つ。Em邸では、ウラ空間をコミチの方向に設定しており、主屋とコミチの間に付属屋を建て、主屋南側に広い作業庭を確保するなど、限られた屋敷内の空間を有効活用している。

ここで、Em邸東側に建つ[事例33]に注目する。[事例33]は、Em邸の分家にあたり、主屋は本家に倣った構成をとる。しかし、Em邸は雨樋を土間上部に渡すのに対し、当家は居室上部に架け渡す稀有な事例である。[事例33]では、自邸より本家に対する配慮を優先させており、ウラ空間の設定は、物的環境だけでなく、本家分家関係という社会的関係も大きく影響していることが読み取れる。

6. まとめ

犬井道集落を通して描き出される漏斗造の本質は、共通の空間構成原理を用いた表象性の獲得にある。一方で、特異な屋根を用いた表象性の獲得には、代価としての雨樋に対する配慮が必要であり、こうした主屋を許容する屋敷構えが存在してはじめて漏斗造は成り

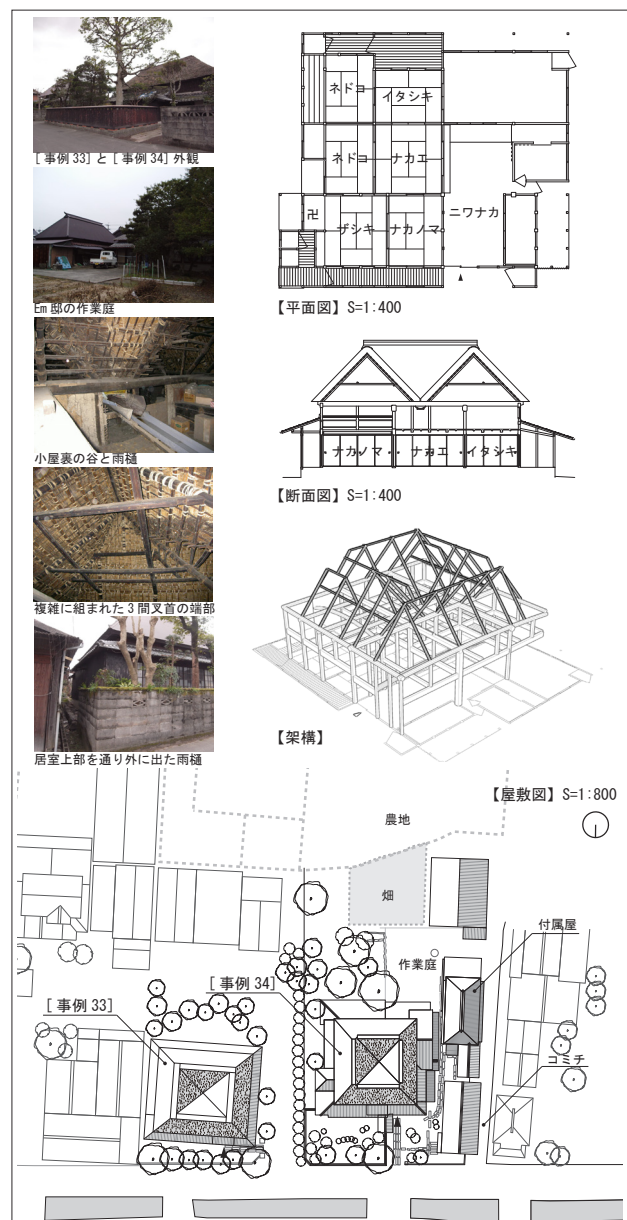


図6 [事例34]Em邸とその周辺
立つといえる。つまり、機能的なプライオリティの低いウラ空間も、社会的視点からみると重要な存在と位置付けられる。犬井道集落では、大幅な集落拡大のために屋敷に関する集落規模の秩序が生じにくい状況にあったと考えられる。そのため、集落拡大を経て高密度な居住環境を形成するには、各々が立地する環境に柔軟に対応できる屋敷構えが必要不可欠だったといえる。
したがって、犬井道集落における漏斗造の在り方は、漏斗造民家が集中的に集積し、ひとつの巨大な居住地を形成したという特異な集落拡大プロセスの中に見出せるのである。

- 1) 屋根形態の発生要因として多く挙げられるのは、台風と地盤沈下に対する対策である。また、漏斗造に関する研究の中で最も代表的なものは、青山賢信による民家緊急調査に基づいた研究である。青山は、『佐賀県の民家』の中で佐賀県の茅葺き民家の屋根形態と間取りの分類を行い、漏斗造民家の発展過程について熊本県の別棟形式から発展したものだという見解を述べている。
- 2) 牛島朗・菊地成朋・宮崎晴加：「巨大塊村犬井道集落の形成 - 有明海沿岸地域における干拓村落の空間特性に関する研究 その3」、日本建築学会2010年度大会学術講演梗概集、2010
- 3) 佐賀県教育委員会：『佐賀県の民家』、佐賀県、1974
- 4) 千手正美：『日本地理風俗大系（第11巻）九州地方』、誠文堂新光社、1960